

## 〔2〕高柳記念奨励賞（2件）

まつやま しゅんすけ  
松山 駿介氏（富士通日立プラズマディスプレイ株式会社 専務取締役）

### “プラズマディスプレイ（PDP）の研究と事業化”

富士通はプラズマディスプレイパネル（PDP）のカラー化及び量産化を目指し開発を推進してきた。様々な課題を解決し1992年に実用的な形で21型（対角53cm）カラーPDPの開発に成功した。その後42型（対角106cm）の開発を機に量産工場を建設、いち早く量産を開始した。更に、25型（対角64cm）SXGA カラーPDPの開発、ALIS方式の開発と常に業界の最先端を歩んでいる。松山氏は、技術開発の指揮をすると共に、量産に先立ち、PDPを市場創世型の商品と位置づけ新しい市場の開拓をした。1999年7月に日立との合弁会社、富士通日立プラズマディスプレイ株式会社を設立、業務を移管後も専務取締役として開発部隊をリードしている。以下にその主な業績の概要を示す。

1. 大型で薄く軽いPDPの特長を活かし、寿命、明るさ、階調表示、等の課題を解決し21型カラーPDPを開発した。ここで採用した、3電極面放電構造、反射型構造、ADS駆動方式、ストライプリブ構造はその後AC型PDPの基本形となった。
2. 開発当初の夢であった大型壁掛けテレビを可能にする42型カラーPDPを開発した。世界初の大きさであるため製造設備の開発から手がけ、新しいプロセスの開発、駆動方式の改良を行った。本機種の開発成功によりPDPの事業化を決断、工場建設、量産を開始した。
3. PC、ワークステーション用に25型SXGAカラーPDPを開発した。25型という大きさと、CRTによる大型グラフィック端末と比べ非常に薄いため、作業机の一番奥に置いても見やすく、作業環境の改善とスペース効率の向上が得られる。
4. PDP画面の有効利用と更なる高精細表示用としてALIS方式を開発した。今まで表示電極の片側だけを使っていたものを、表示電極の両側を使い同じ電極数で倍のラインを表示出来るようにしたもので、家庭用壁掛けHDTVを簡単に実現出来る方式である。

上記の通り、松山氏は常に技術者の先頭に立ってカラーPDPの技術確立をすると共に、大型カラーPDPで事業化を決断し、量産工場を建設する等、氏の功績は高く評価されている。